

『存在と時間』における世界の無と自己について

加藤浩士 (名古屋大学)

序論

本論文では『存在と時間』の不安 (Angst) において露わとなる「世界としての世界と単独化した純粹で被投的な存在可能性としての内存在 (Die Welt als Welt, das In-Sein als vereinzelt, reines, geworfenes Seinkönnen)」(SuZ.S.188)、すなわち不安が開示するもっとも根源的な次元の世界と自己を統一的に理解することを目指す。不安は「最も射程範囲が遠く、もっとも根源的な開示可能性の一つ」(SuZ.S.182) であり、日常への埋没から現存在をおのれの存在の前に連れ去るような特異な開示性として考えられている。そのため不安が露わにする世界としての世界 (以下、世界の無 (Nichts der Welt) と表記) と単独化された現存在は、もっとも根源的に開示された世界と現存在であり、そのためそれを理解することは、現存在分析を主眼とする『存在と時間』における最大の課題の一つといっても差し支えないであろう。しかしハイデガーは『存在と時間』における不安の分析において、世界の無と単独化した自己が統一的に露わとなる必然性については説明できておらず、我々が解釈することで補う必要がある。特になぜ不安の中で自己の存在に目が向くことで、世界が無意義性を帯びて自己に襲い掛かることになるのか、またこの二つがあいまって構成する事態がどのようなものであるのかは、世界性における自己の可能性の役割および死の可能性について解釈しなければ理解できないだろう。本論文はハイデガーの世界性の分析と死の可能性について重点的に分析することで、上記の問いについて答えることを目指す。

簡単に本論の筋道を示すことにしよう。まず世界性に関するハイデガーの分析を再構築し、世界と自己の関係性について確認することにする。そのさい現存在が自己をどのように理解するのかに相関して、環境世界が開示されるという点を示したい。この点が世界の無と単独化した現存在を統一的に理解するうえで、決定的に重要だからである。次に不安と死の関係性について押さえたい。ハイデガーは死の可能性が本来的に押し迫るのは、不安に襲われているときであると考えているからである。死の性格を必要な範囲で簡単に押さえた上で、死と不安を理解するうえで重

要な単独化について理解したい。最後に 40 節のハイデガーによる不安の分析を精査することにする。不安が、世界内存在することが重荷 (Last) であるような気分であることを示す。そのうえで世界の無と単独化した自己が、可能性を選択することが重荷としてのしかかっている世界内存在のありようから、統一的に理解できることを示すことを課題とする^①。

1 世界と自己理解の関係性について

この節では以下の考察のために『存在と時間』の基礎的な概念を確認することにする。特に現存在の自己理解と世界の関係性について重点的に分析する。『存在と時間』は存在一般の理念を探求する、基礎作業としての現存在分析を最大の課題としている。現存在とは存在について何かしら理解している人間を表す術語である。ハイデガーは現存在の存在体制を世界内存在 (In-der-Welt-sein) と規定する。ハイデガーは世界内存在の全体像を素描するうえで、住むこと、慣れ親しむことを例に挙げており (SuZ.S.54)、世界内存在とはまず世界に馴染んでおり、勝手がわかっていることとして規定される。世界内存在するさいに住み込んでいる世界とは、さしあたり環境世界という性格を持つ点をハイデガーは指摘 (SuZ.S.66) する。ここで押さえるべきは世界内存在とは、自己と世界が相互独立に関係する事態を意味するのではなく、自己と世界が共属することで構成された統一的な現象だということである。そのため自己と世界は、世界内存在という存在体制に織り込まれた契機として考えられている^② (SuZ.S.53)。以下の説明でこの共属関係が何を意味するのかについて示すことにしよう。

彼の考える環境世界とは我々がそのうちで生活を営む場所のことである (SuZ.S.66)。ハイデガーは道具がもつ指示の性格に焦点を当てつつ、この環境世界の構造について分析していく。道具は何かをするためのものであり、すなわちなにかを指示する性格をもっている。この指示は連なって最終的には、道具を使用する人間の存在にまで達することになる。例えばハンマーは釘などを打ち込むために存在し、釘は家を支えるために存在するのだが、その家は人間が生活を営むために存在する。人間の存在はさらに根拠づけられることはなく、それが道具の指示を支える役割を担うことになる (SuZ.S.84)。ハイデガーはこのような指示の結び目を「主旨 (worum-willen)」と呼び、現存在の可能性がそれに当たると考えている

(SuZ.S.84)。我々は自己をある可能性から理解しており、それを根拠として道具の指示は成り立っているのである。そのため環境世界は現存在が自己理解を媒介にして、道具を理解するような場所としての性格を持つ。ハイデガーは道具の指示する性格を、存在論的に彫琢し道具の存在を適所性 (Bewandtnis) と呼び、以下のように世界を特徴づける。「適所性の存在様式をもつ存在者がそれを見越して (woraufhin) 出会われるところは、自己を指示しつつ了解する場所でもあるが、それこそが世界の現象なのである」(SuZ.S.86)。

このように環境世界とは、現存在の可能性を主旨として結びついた適所性の全体のことであり、そのうちで現存在は道具を露わにしているのである。このような環境世界の構造は、すでに見た通り現存在の主旨とそれに基づいた指示の全体であるが、ハイデガーはこのような合目的性を有意義性と特徴づける。ハイデガーにとって世界の世界性とは、そのつどの世界がそこから規定される原理のことであり⁽³⁾、世界の構造である有意義性こそがこの世界性に他ならないのである。「現存在がそれを見越して自己を指示するところの構造が、世界の世界性を構成するものなのである」(SuZ.S.86)。現存在および道具さらには他の現存在も、有意義性を媒介にして理解されるのである。そのため現存在の存在体制である世界内存在とは、自己や道具などがそこから意義を汲み取るような世界のうちに馴染んだあり方を意味し、その都度ある可能性からすでに自己を理解してしまっているようなあり方を意味することが、ここから理解できるだろう。

主旨と有意義性についてさらに説明しよう。環境世界とはさしあたり我々に開示されている世界のことであり、そのためさしあたり我々がそれであるところの自己の存在様態 (Seinart) において開示されているものである。他者との日常生活をする現存在の存在様態は、ヒト (Das Man) と呼ばれる (SuZ.S.127)。そのため環境世界はヒトを主旨とすることで開示される世界のことであり、他の共同存在との違いを気遣いながら、慣習に従って生きるようなあり方がヒトのあり方に他ならない。ハイデガーのヒト分析はかなり詳細であるが、ここではこの意味のヒトが配慮可能なものを支えにして自己を理解するという性格を持つ点を指摘するにとどめたい⁽⁴⁾。我々は日常を営みヒトに紛れる中で、仕事などの配慮の対象との関係から自己を理解しているのである。

以上で自己理解と世界の関係性について確認できた。有意義性としての世界性は現存在の可能性を根拠としており、環境世界はヒトを主旨として、さらには配慮可

能なものとの関係が根拠となっていることが理解できた。世界内存在とはこのように自己と世界が織りなす統一的な現象なのである。次の節では死の可能性を分析することを通じて、もはや配慮可能な事物との関係から自己を理解できない、現存在の有り様について確認することにしたい。

2 不安と死の関係性について

この節では死(Tod)について重点的に分析することにする。ハイデガーは死と不安には密接な関係があると考えている。「死へと投げ出されているということは、不安の情態性のうちでより根源的に押し迫って現存在に露わにされるのである」(SuZ.S.251)。「死に臨む存在は本質的に不安である」(SuZ.S.266)。そのため不安を理解するうえで死の可能性は重要であり、特に世界の無の無意義性の性格を考察するうえで避けては通れない。この節では死の可能性を分析するが、不安を理解するうえで重要な「固有な (eigen)」・「係累のない (unbezüglich)」性格について確認したい。死の可能性がヒトとして自己を理解していた現存在に対し、他ならぬ自己の存在を浮き彫りにし、単独化する点を示すことを課題とする。単独化とは自己の存在のみに関心が向かい、他者や道具的的事物がどうでもよくなるようなあり方を指す。「それは〔単独化〕は、ひとごとでない自己の存在可能性が問題となるときには、我々が配慮しているものごとのもとの存在や他の人々との共同存在が、すべてものをいわなくなることを露わにする」(SuZ.S.263□ない引用者補足)。この単独化こそが、不安において自己の存在が問題となり、世界の無が開示されることを理解するうえで決定的に重要な概念なのである。

まず死の可能性をハイデガーがどのように分析しようとするのか確認したい。ハイデガーは死をすべての自己の可能性が不可能になる特異な可能性であると捉えており、それを直接経験することは不可能であると考え。そのため死の可能性を死へと向かう有り様から捉えようとする。つまり死の可能性を現存在がどのように了解し、どのように対峙するのかという観点から分析するのである。ハイデガーは死の可能性を以下のように考える。「現存在の終末 (Ende des Daseins) としての死は、もっとも固有で係累がなく、確実にそれ自身、無規定で追い越すことのできない現存在の可能性である」(SuZ.S.258 - 259)。我々はこの中から「固有」・「係累のなさ」について分析することを通じて、死の可能性が現存在を単独化する点を確

認したい。

死の可能性が固有であるとは、死が誰のものでもない自分の可能性であり、また自分だけが引き受けることのできる可能性であるという意味である (SuZ.S.240)。例えば誰か大切な人が死んでしまったさいに、代わりに自分がその人の死を引き受けることができたらと思ったとしても、そのようなことはできない。仮に死刑を代わりに引き受けることができたとしても、いつか来る彼の死は依然として彼が引き受けるしかないものである。その意味で死の可能性は各自に固有のものである。またこのような可能性を引き受けることができるのは自分だけであり、死の可能性に臨むことで現存在の世界内存在が浮き彫りになるのである。「さらに言えば死は、そのうちで各自に固有の現存在の存在が端的に問題となるような特異な存在可能性なのである」 (SuZ.S.240)。死には自己の存在を気づかせる性格があり、これが死の係累のない性格を理解するうえで重要である。

我々は日常においてヒトの可能性から自己を了解しているため、自己を見失っているということは確認している。自己を見失うということは、正確さを欠く表現ではあるが、日常に流され他者との関係に追われる中で、自分のことを忘れてしまっているようなありようのことである。しかし死の可能性が押し迫ることで、ヒトのうちに紛れてしまった現存在の世界内存在が浮き彫りになる (SuZ.S.263)。このさい他者および配慮的な事物が、現存在にとって重みを失うことになる。このように他者や事物との関係を解く性格を指して、死の可能性は係累のない可能性と呼ばれるのである。

しかしこれがいかなる事態であるのかは説明が必要であろう。押さえるべきは、死の可能性が現存在の固有な存在可能性である実存にのみ目を向けさせるということである (SuZ.S.263)。死の可能性は、ほかならぬ自己の存在に的中し、現存在の目をそれに向けさせる。そのさい自己の存在のみに関心が向かうことで、他の道具や他者はいわば関心の外におかれることになる。そのため死の可能性は他の存在者との関係を解消するという意味で、係累のない可能性と呼ばれるのである。死の可能性の二つの性格について確認できた。本論文最大の課題である不安の分析に移ろう。

3 不安および世界の無と単独化した自己について

この節では不安がいかなる気分であるのかを確かめたのち、不安において露わとなる世界の無と単独化した自己を統一的に理解することを目指す。死の可能性と死の分析の前にある『存在と時間』40節の不安の分析のつながりを理解し、死の可能性による単独化が不安を理解するうえで決定的に重要である点を示したい。不安が自己の世界内存在が重荷となるような気分であることを示した上で、世界の無と単独化した自己を統一的に理解したい。

ハイデガーは不安を分析する動機として、それまでの分析の成果を統一的に理解するために現存在の存在全体を示す開示態を分析する必要を挙げている (SuZ.S.182)。不安は現存在を自己の存在へと引きもどし、もっとも深くかつ広範囲に現存在の存在を露わにするものとして、方法論的な必要から分析の対象に選ばれる。しかし不安は根本情態性として考えられており、そのため本来性に必然的に属する気分でもある。不安を理解することは、『存在と時間』の現存在分析を理解する要なのである。

ハイデガーは不安と類似した気分である恐怖 (Furcht) について分析している。我々も不安を具体的な水準に落とし込んで理解するためにも、恐怖を参照することにする。ハイデガーが恐怖を分析するうえで注目するのは、恐怖が何に直面 (Wovor) しているのか、そして何を案じているのか (Worum) という点である。恐怖において現存在が直面しているものは、現存在を脅かすものである (SuZ.S.140)。例えばナイフで脅す人である。それに対して恐怖において案じられているものは、自分の体が傷つけられる、物を奪われるといった自己の有り様である (SuZ.S.141)。恐怖に襲われる際に我々はわざわざ自分のありようについて思い浮かべることはなく、端的に恐れるのではないかと思うかもしれない。しかし意識化されることはなくとも、自己のありようを気遣うことがなければ、無方向でカオスな心的現象になってしまい、我々が体験する恐怖とは異なるものとなるだろう。このように恐怖はある特定の内世界的な存在者に向き合い、ある特定の事実的な可能性を案じることが属している。

ハイデガーは恐怖の分析を踏まえて、不安において直面しているもの、案じられているものを分析する。不安と恐怖の決定的な違いは、直面しているものと案じられているものが、不安では世界内存在である点である⁽⁵⁾。そのため不安が直面して

いるもの、案じているものは世界の内にはない。まず理解することが難しい、不安において直面しているものを確認しよう。40節では世界の無および世界が属する世界内存在が、不安において直面しているものであるとされる(SuZ.S.186-187)。しかし死の分析をするなかで、死の可能性が不安において直面しているものであると書かれている(SuZ.S.251)。不安において直面するものは多義的に語られており、それらを統一的に理解することが重要である。まず世界の無の特徴について確認する。1) 有意義性が崩壊したのちに現存在に開示される世界のことであり、無意義性という性格をもっている(SuZ.S.186)。2) 内世界的な存在者という観点からすると無であり、どこにもない(SuZ.S.186-187)。3) 直接的に根源的に開示された世界のことであり(SuZ.S.187)。4) 道具的な存在者の可能性の総体である(SuZ.S.187)。(6)本論文ではそれぞれに十分な解釈を示すことはできないが、1)と4)の特徴を理解することを通じて、世界の無がなんであるのかを示したい。そのさい死の可能性を押さえることが重要である。なぜなら死の可能性こそが有意義性としての世界を崩壊させ、無意義性としての世界を露わにするからである。

死の可能性が現存在を単独化する点は確認できている。死の可能性が押し迫る際には、もはや事物や他者は現存在にとってどうでもよくなり、自己の存在のみが問題となるようになる。環境世界はヒトを主旨とする中で成立しているのだが、死の可能性がヒトから自己を連れ出すことで、環境世界は重さを失うことになる。つまり個々の道具を意味づけてきたヒトという主旨が重みをなくすことで、それに伴いすべての道具的事物の可能性もまた重みを失うということである。死の可能性は世界から有意義性としての性格を奪い、無意義なものとする。そのさい開示される世界の無は、よそよそしい道具的な可能性の総体として現存在に襲い掛かる。

これがいかなる事態を意味するのか説明しよう。死の可能性が押し迫ることで、ヒトのうちに埋没することができず、自己の存在を問題とせざるをえない。それに伴い、これらの主旨に基づいていた道具的存在者もまた重さを失うことになる。現存在にとって道具の全てはどうでもいいものとなるが、これは目の前にある道具だけではなく、関わりうるすべての道具が重みを失うのであり、つまり道具的な可能性の全てがそうなるのである。しかし現存在は世界内存在する限り、自己を可能性から理解しなければならず、選択の重荷を担わされている。そのため道具的な可能性の総体はただ重みを失うのではなく、それでもなお選択を迫るようなよそよそしいものとして押し迫るのである。すなわち世界内存在する限り、自己の存在が問

題となることは必ず、世界をもまた問題とせざるを得ないのである。そのためハイデガーは不安の内で世界内存在が問題となるとも語るのである (SuZ.S.187)。

例えばある人が自分も死ぬという可能性にはたと思ひ至り、自己の存在を痛切に意識することで、すべてのことに意味を見失ってしまったとする。目の前にあることだけではなく、すべてのことがらに対して意味を見いだせなくなり、自己がすべての可能性から疎外されているように感じるだろう。そのさい自己の存在だけが問題となるのではなく、疎外されるという仕方において世界が我々に対して露わとなっているのであり、無意義な相を帯びて我々にのしかかるのである。その意味で道具的な可能性の総体が、不安において現存在に襲い掛かるのである。不安において直面しているものが、死の可能性であり世界の無であり、また世界内存在というのは、以上のような事態を意味するのである。

不安において案じられているのも、現存在の世界内存在であり、死の可能性に直面して単独化した現存在である。「不安がそれを案じて不安を覚えるのは、世界内存在そのものである」(SuZ.S.187)。死の可能性がヒトに紛れ込んでいた現存在を単独化するのだが、これは死の可能性がほかならぬ自己の存在に気付かせることでもある。不安が案じるのは死の定めを背負った現存在の世界内存在そのものであり、あれやこれやの自己の事実的な可能性ではない。「不安は死によって規定された存在者の存在可能性を案じ、最も極端な可能性を開示するのである」(SuZ.S.266)。そこではそれらの事実的な可能性を、いわば演じている現存在の存在そのものが案じられている。

世界内存在することの重荷と死にさらされた自己の世界内存在が、不安のうちでは露わとなる。不安が自己の存在の前に連れ出す、根源的で射程の広い開示性であるということの意味は、内世界的な存在者を媒介することなく、世界内存在が端的に露わとなるということである。このようなことが起こるのも、死の可能性が現存在を単独化することで、ヒトへ現存在が逃避することができなくなることによる。いわば死の可能性によって自己の存在が浮き彫りになることで、実存する重荷が露わとなる気分が不安であるといえよう。しかし実存が重荷となる事態は、ただ自己の存在のみを気遣うのではなく、自己が投げ込まれた世界そのものにも目を向けさせることになる。なぜなら実存が問題となる事態は、この世界でどのように生きるべきかが問題となる事態とまさしく同じ事態だからである。

我々は世界の無と単独化した自己を統一的に理解することを課題としていた。実

は今までの分析で、すでにその答えが出ている。無意義性とは、配慮可能なものとの関係から自己を理解できない現存在に開示される世界の性格である。単独化した現存在に開示される世界こそが世界の無である。つまり死の可能性が現存在を単独化し、すべての道具的な可能性が選択を迫るものとして現存在に襲い掛かってくるという事態こそが、世界の無と単独化した自己の統一的な現象なのである。

結論と展望

世界の無と単独化した自己は、実存を軸にして統一的に理解できた。つまり世界の無と単独化した自己は、全ての道具や他者が重さを失った後もなお残っている世界の全体が、単独化した自己に選択を押し迫るという事態から統一的に理解できる。『存在と時間』における、ハイデガーの考える根源的な世界と自己の関係性とは、このような事態なのである。不安の経験こそが『存在と時間』の根本経験であり、人間である現存在はこの根本経験を背景に理解されている。このことはハイデガーが、現存在を自己の存在を問題にする存在者である (SuZ.S.42) と規定することからもうかがえる。なによりも現存在とは自己の存在を気遣う存在者なのであり、それが端的に露わとなるのが不安なのである。

1929年「形而上学とは何か」であらためてハイデガーは不安を分析するが、そのさい我々を形而上学へと導く気分として捉え直されることになる。『存在と時間』後しばらく、ハイデガーは人間の根源的なあり方を形而上学することの内に読み取るが、そこでも不安に関する理解は決定的に重要なのである。特に世界の無は、存在者ではないという意味の存在と重ねて理解されるようになり、『存在と時間』後の彼の哲学において重みを増していくことになる。本論文で得た知見をさらに掘り下げることによって、『存在と時間』後の彼の哲学の歩みを、世界と自己の関係性という観点からより深く理解していくことにしたい。

注

- (1) クラウス・オピリークは不安において開示される世界の無に注目し、世界の無が時間性によって基礎づけられない点に『存在と時間』の挫折を読み取ろうとしている。参照 (Klaus Opilik, 1993, S. 57 - 128) 傾聴すべき説であるが、『存在と時間』の段階において不安の無はやはり現存在の実存を起点にして考えら

れており、実存から理解可能なものとして考えることができるように思われる。もはや自己をそこへと企投することができない可能性の総体として世界の無は考えられているからである。

- (2) 世界が現存在の存在体制である世界内存在に属するという記述に違和感を持つかもしれない。しかしハイデガーは世界内存在を三つの契機に注目して分析する際に、世界もその契機のうちのひとつとして考えており、あくまで世界内存在に属するものとして捉えている (SuZ.S.53)。
- (3) ハイデガーは世界性を、さまざまな世界が含んでいる原理として考えている。「世界は存在論的・実存論的な世界性の概念を特徴づける。世界性それ自身はある特殊な諸世界 (引用符) のそのつどの構造全体へと様態化するのだが、世界性一般のアプリオリをそのうちに含んでいるのである」 (SuZ.S.64)。
- (4) 「現存在は、自分が配慮しているものに基づいておのれへ立ち返る。そのため非本来的な将来は予期 (Gewärtigen) という性格を持つ。ヒトが配慮するものに基づいて、ヒト—自己として自己を配慮的に了解することは、その可能性の〈根拠〉を予期という将来の脱自的なる様態の内に持つのである」 (SuZ.S.337)。
- (5) ヘルマンは不安が面しているものを被投された現存在、案じているものを企投する現存在として考えている。しかしこのような区分は形式的であり、説明としては弱いように思われる。参照 (von Hermann, Friedrich-Wilhelm, 2008, S.178-179)
- (6) 「押し迫ってくるものはあれやこれやのものではなく、また総体としての客体的なものすべてでもなく、むしろ用具的なものの可能性一般のことであり (die Möglichkeit von Zuhandenem überhaupt)、つまり世界それ自身である」 (SuZ.S.187)。

【参考文献】

“*Sein und Zeit*”については、SuZ という略号と頁数を表記し、その他の文献については著者名、出版年、ページ数を表記する。

辻村公一 『ハイデッガー論攷』 創文社, 1971年。

Daniel, O. Dahlstrom. “Authenticity and the absence of death” Heidegger, *Authenticity and the Self*.

Themes From Division Two of Being and Time. Ed. Daniel McManus. New York:Routledge,

2015.146-162

Denis McManus, "Anxiety, choice and responsibility in Heidegger's account of authenticity" Heidegger,

Authenticity and the Self. Themes From Division Two of Being and Time. Ed. Daniel McManus.

New York: Routledge, 2015. 163-185

Klaus Opilik, *Transzendenz und Vereinzelnung: Zur Fragwürdigkeit des transzendentalen Ansatzes im*

Umkreis von Heideggers "Sein und Zeit", Freiburg/München: Karl Alber Verlag, 1993.

Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 19. Auflage. Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 2006.

Sacha Golob, *Heidegger on Concepts, Freedom and Normativity*; Cambridge University Press, 2014.

von Hermann, Friedrich-Wilhelm, *Hermeneutische Phänomenologie des Daseins: Ein Kommentar zu*

"Sein und Zeit" Band 3 "Erster Abschnitt: Die vorbereitende Fundamentalanalyse des

Daseins" §28-§44, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann Verlag, 2008.

